

電子情報市場化時代の自立と協力

——大学生協の生き残る道——

大学生協連会長理事 庄司興吉

まえおき

4月19日から20日にかけて、Y大を訪問し、学長に会ってきました。理事長・専務理事セミナーの関連で、お願い事があったからです。そこで、もう一つのY大と似たような話があると聞き、ショックを受けました。

その前後をつうじて、この3年間、大学生協にかんし、いろいろな機会に話した主要なものを集め、『大学改革と大学生協』という本の原稿をつくりました。これまでの話の半分しか収録できないのですが、主要な筋は通しています。その課程で、重要だが今までに明示的な形で言ってこなかったことに気づかされました。

今日はその話です。

1 自立とは？

電子情報市場化時代の自立と協力ということで、大学生協がこれから生き残っていくためにぜひとも必要なことです。ビジョンとアクションプランとの関連で、協同、協力、自立、参加という使命に、これまでなんども言及してきました。そのなかの自立と協力です。まず自立とはなにか？ というまでもなく、自立とは、自分の足で立つこと、そして自分の身体を確かめることです。

2 人間が生きるとは？

では、身体とは何か。前にも言いましたが、人間は、物質代謝 **metabolism** と象徴操作 **symbolism** を同時遂行しながら生きています。物質代謝とは、酸素を取り入れて炭酸ガスを出したり、食物を取り入れて不要物を排泄し、われわれの身体を形成し維持すること。そして象徴操作とは、言語に代表されるようなシンボルを操り、この世界を意味づけると同時に、そのなかにわれわれの身体を定位させ続けていくことです。このような物質代謝と象徴操作の同時遂行をつうじて、われわれはさまざまな身体連鎖＝関係性 **relationships** を形成し、そのようなもの、すなわち社会として生きているのです。

かつて盛んに論じられたことですが、初期のマルクスが『ドイツ・イデオロギー』などで用いた **Verkehr** という概念があります。最近あまり言う人はいなくなったと思いますが、数年前に出た『世界共和国へ』（岩波新書, 2006）という本で、柄谷行人がもう一度ふれています。ドイツ語の辞書で **Verkehr** を引くと、交通、交際、通商、通信、性交という5つの意味が出てきます。その基礎に自然との交渉がある。こう考えると、これでほとんど人間のやっていることが尽くされます。

『資本論』のなかに「人間の労働は物質代謝である」という有名な定義が出てくるのですが、マルクスは当初、それだけでなくここにいう交通、交際、通商、通信、性交をすべて含めて、すなわち **Verkehr** として人間の行為を考えていた。それがその後、主として物質代謝を意味する労働と交換だけに限られていってしまったことから、とくにコミュニケーションにかかわる行為の部分が非常に弱くなってしまったので、その面を補おうとしてユルゲン・ハバマスなどが出てきたという経緯があるのです。

これで分かるように、もともと人間は、物質代謝と象徴操作を同時並行的に行ないつつ身体連鎖つまり関係性を展開して、生きているのです。

3 だから自己とは？

そのなかで自己とは何か。われわれは動物ですから、四六時中呼吸をすると同時に、飲食・排泄をして、われわれの身体の基本を維持している。このために、またこれを基礎に、労働しつつ性行為を行なって、われわれの種すなわち社会を形成し維持している。われわれの生活手段を生産すると同時に、われわれの子孫を生み育てていく、二重の意味での再生産すなわちリプロダクションです。

この過程で、動物としての諸行為は不可避免的に社会的な諸行為に展開していく。すなわち、労働を基礎に広範な交換が展開されていくと同時に、性行為をつうじて家族親族形成がおこなわれ、社会の基礎がつくられていく。そして、これらをつうじて一貫してコミュニケーションが展開され、外延的に人間社会が展開していくだけでなく、内包的に無限の可能性を秘めた人間文化が展開されていくのです。

4 だから社会的自己とは？

だから、社会的自己とは、社会的分業のなかにあり、家族親族形成をおこないながら社会組織を展開していく、その過程でさまざまなコミュニケーションを展開しつつ、さまざまな人びとと関係性を取り結びながら、それらの結び目 **nod** の一つとして、自覚を維持していくことです。だからこそ社会的自己は、物質的かつ組織的であるだけでなく、高度に情動的であり、そうでなければならないのです。

5 情動的に統括される自己

私がこれをあえて言うのは、これが自立の意味の要にかかわるからです。私はくり返し、自立とは基本的には、財政的自立すなわち赤字は出さないということと、組織的自立すなわち生協の原則に則って民主的運営をすることだと言ってきました。

それに加えて、これが不十分だったということで今言っているわけですが、情動的な自己管理、すなわち生協にかかわる諸個人の自己管理と、組織としての生協の自己管理が厳しく要求されるのです。

昨年、R大のケースやY大のケースなど、情報管理のずさんさから、大学生協が危機にさらされる事態が起こっています。あらためてこの面を全国の大学生協に厳しく反省してもらわなければなりません。自立ということが情動的な自己管理を含むのだということ、ここまで含まないと徹底した自立にならないのだということを、自覚していただく必要があるのです。

われわれの社会的自己は、述べてきたようなコミュニケーション関係のなかで、これが自分だという意識、つまりアイデンティティです。私は、グローバル化の基礎は電子情報市場化であること、グローバル化はほとんど電子情報市場化そのものであることを強調してきました。情動的な要素が加速度的に重要性を増している時代において、自己のアイデンティティを維持していくことの意味、電子情動的に自己を統括していくことの意味、つまりこういう時代において、自分が何であるか、どういう仕事をしているかということをしつかりと把握していく必要があるのです。外部に不手際を露出して、つけ込まれるようなことのないようにしなければなりません。

6 自立していなければ協力もできない

そのうえで協力ですが、自立がきちんとできていないと、協力つまり大学との関係もうまくいきません。協力すなわちコラボレーションとは、自立した主体間の動的な関係性だからです。主人と奴隷の関係とか、優位に立つものと劣位に置かれたものの関係性では、コラボレーションは生まれようありません。われわれは協同組合つまりコオペ

ラティブですから、協同つまりコオペレーションを基礎にして、大学と協力すなわちコラボレートしていくと言っているのです。

Y大の学長が、ある人びとが使用料徴収ということを考える大きな理由の一つとして、大学と生協との関係が業務委託契約になっている、ということに言及しました。全国の多くの大学で、大学生協が業務委託契約という形で、大学との関係で取り結んでいることが少なくないかもしれません。このため少なくない大学は、大学生協との関係を、外部から入ってきた企業に業務を委託するのと同じような感覚でとらえているのです。それでよいのかどうか。そもそも業務とは、何のことを言っているのか。

7 組合員に依拠しないからそういうことになる

大学生協は、大学の構成員である学生・教職員が、協同をつうじて自分たちの生活の基礎を支えていくためにやっているわけで、それをたんに業務としてとらえる捉え方にたいしては、大学生協の考え方をきちんと出していかなければなりません。大学がそういう捉え方になってしまう原因の一つには、大学生協も日常的には生協職員の手で運営していかざるをえないので、生協職員に組合員に雇われているのだという意識が弱いと、どうしても業者のような振る舞いかたをしてしまうということがあると思います。

そうするとそれが、大学から見ると、外部の業者と生協とを比較して、どちらが良いかと比べてしまう根拠にもなってしまいます。そうさせないために、生協職員は、あくまでも組合員に依拠し、自分は生協に雇われている職員であるということを忘れずに、組合員に生協とはなにかを思い出させ、そのことをつうじて組合員の積極性を引き出していくということを、くり返しやっていかなければなりません。

8 組合員も目覚めなくてはならない

組合員のほうも反省して、こういう時代における生協の意義を思い出し、目覚めなければなりません。昨年秋からの経済状況の悪化で、学生のなかに授業料が払えないなどの理由で、勉学が続けられない者が出てきています。全国的にかなり深刻な状態であることが、新聞などでも報道されていますから皆さんも良くご存知でしょう。さらには、今年の入試の過程を見ていると、親がリストラされたなどの理由で、そもそも大学受験自体をあきらめざるをえない高校生も出てきています。

そういう事態のなかにある大学生協の意味を良く考えなくてはならないでしょう。かつては食料すら十分でない時代に大学生協ができたわけですが、今それとは状況も次元も違った危機が広がってきているのです。そのなかでの大学生協の新しいあり方を考えていかななくてはならないでしょう。

くり返しますが、自立の意味を十全にとらえ、財政的自立、組織的自立に加えて、情報的自立をきちんとしなければなりません。そのうえでわれわれは大学と協力していくのですが、自立がうまくいって多少の剰余が出た場合にはどうするか。大学生協を業者のように見る大学はそれを狙ってくるわけですが、それにたいしては、大学生協はそれ自身の考え方を積極的に打ち出していく構えでなくてはいいけないでしょう。

つまり、大学生協のあり方行き方を積極的に打ち出していく。剰余が出た場合には、それをどう使うかを示す形で、大学に大学生協のあり方行き方をはっきりと示していくのです。その前提として、大学との契約関係も、一度結んだから良いのだというふうにせずに、生協と大学との関係をできるだけ生協本来のあり方に沿う関係に変えていく方向で、できるだけ柔軟に考えていかななくてはならないでしょう。

この点にかんして、理事会にも案が出されると思います。基本的なことを忘れずに、活発に議論し合うことを期待します。

(理事会－090516)